

Title	英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』研究の歴史と動向： テキストの成立と伝承における創作意志をめぐって
Sub Title	Die Tendenzen der Forschung über „Der Rosengarten zu Worms“ : Über den schöpferischen Willen in der Entstehung und Überlieferung der Texte
Author	渡邊, 徳明(Watanabe, Noriaki)
Publisher	慶應義塾大学独文学研究室
Publication year	1999
Jtitle	研究年報 (Keio-Germanistik Jahresschrift). No.16 (1999. 3) ,p.1- 22
JaLC DOI	
Abstract	<p>„Der Rosengarten zu Worms“ (Rg.) ist ein Heldenepos aus der Gattung der Dietrich-Epen, in dem Stoffe des Nibelungenliedes parodistisch verarbeitet wurden. Über die ursprüngliche Autorschaft dieses um 1250 entstandenen und bis zum Ende des 15. Jhs. in verschiedenen Textfassungen überlieferten Epos herrscht bis heute Unklarheit. Seit Beginn des 19. Jhs. hat sich die Einstellung zum Entstehungs- und Überlieferungsprozess der Rg.-Texte gewandelt. In diesem Zusammenhang hat sich vor allem die Ansicht über die Beziehung zwischen der subjektiven Produktivität einer Autorpersönlichkeit und dem Einfluss durch autorexterne Elemente verändert. Wilhelm Grimm (1836) und Georg Holz (1893) dachten, daß die Rg.-Texte aus dem Bestreben des Volkes, dem Nibelungenhelden Siegfried dem Volkshelden Dietrich von Bern gegenüberzustellen, entstanden seien. Es besteht bei ihnen also die Tendenz, äußere Elemente wie hier die Textbedingtheit durch die Verarbeitung und Variation überlieferter Sagenstoffe durch das Volk über den Einfluß einer Dichterpersönlichkeit zu stellen.</p> <p>Die positivistische Textkritikforschung von Hermann Schneider (1921) und seinem Schüler Carl Brestowsky (1929) führte zu einer anderen Gewichtung des Verhältnisses zwischen Überlieferung und Autor. Vor allem Brestowsky untersuchte die Rg.-Texte nicht mehr im Hinblick auf die Rezeption der Sagenstoffe, sondern sah in ihnen vielmehr ein in der realen Welt der literarischen Produktion durch einzelne Autoren hergestelltes Werk.</p> <p>Helmut de Boor (1959) führte diesen Gedanken weiter, indem er in der Auseinandersetzung des Dichters mit der realen Welt einen Ausdruck der jeweils vorhandenen Einstellungen für und gegen die höfische Kultur sah. Diese Interpretation durch de Boor beruht auf der Annahme von der Singularität der Archetypen der Texte.</p> <p>Dagegen hält Joachim Heinzle (1978) seine Auffassung von der Pluralität der Archetypen der Rg.-Texte. Wichtig ist ihm nicht die Einstellung eines einzelnen Dichters, sondern die gemeinsamen Motive und Tendenzen der Dietrichepen. Als besonderes Merkmal dieser Gattung nannte Heinzle die Komisierung und Prodisierung des überlieferten Stoffes.</p> <p>Michael Curschmann (1989) beschäftigt sich mit der wechselseitigen Beziehung zwischen der mündlichen und schriftlichen Überlieferung. Seiner Meinung nach gab es im Spätmittelalter einen im Publikum geführten Diskurs, in dem der Feindseligkeit gegenüber der Protagonistin des Nl., Kriemhild, Raum gegeben wurde. Laut Curschmann beeinflussten sich dieser öffentliche Diskurs und die schriftlichen Textfassungen bis zu einem gewissen Grade gegenseitig. Somit schreibt er dem Publikum einen schöpferischen Willen zu.</p>
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-19990331-0001">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN1006705X-19990331-0001</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』研究の 歴史と動向

——テキストの成立と伝承における創作意志をめぐって——

渡邊徳明

## 0. はじめに

ディエトリーヒ叙事詩群の一つとされる英雄叙事詩『ヴォルムスの薔薇園』(Der Rosengarten zu Worms、以下Rg.)は、ドイツ中世英雄叙事詩の頂点とされる『ニーベルンゲンの歌』(Das Nibelungenlied、以下NL.)のパロディーとして知られる。

Rg. はNL. の成立した1200年頃よりも半世紀程後の1250年頃に、オーストリアからバイエルンにかけての地方で成立したと考えられている。英雄叙事詩特有の性質として、NL. 同様にRg. も作者不詳である。このRg. の写本は13世紀末から15世紀後半までの約200年間に書かれたものである。<sup>1)</sup>

1250年頃にどのようにしてRg. の原テキストが成立したのか、またそれが15世紀後半に到る約200年の間にどのようにして伝承されたのか、という問題の解明は、NL. に対する関心の高まりに伴ってRg. が再び世に知られた19世紀以来、Rg. テキスト研究の主要な目的となってきた。そしてそれに対する見解は、時代によって変わっていった。

このようなテキストの成立と伝承の過程についての見解の変化に伴って、当然Rg. の作者及び伝承者についての見解も時代によって変わっていった。その際Rg. のテキストを記した作者の創作意志と、それをとりまいてテキストの内容・描写を規定する伝説素材、モチーフ、背景的知識など作者に外在する条件の、どちらを重く見るかという点が問題となった。

本稿の目的は、Rg. テキストの成立及び伝承の過程と、そこにおける創作意志の役割との関係についての、先行研究の見解を明らかにすることである。それによって今日のRg. 研究の動向を明らかにしたい。

## 1. テキスト・バージョンの分類

### 1.1. 19世紀におけるテキスト分類と表記の変化<sup>2)</sup>

19世紀前半に始まった本格的なRg. 研究の創始者はWilhelm Grimmである。彼は1836年に発表した研究の中でRg. テキストをA、B、C、D、Eの5種類に分類する。

1859年にはKarl Bartschが、新たに独立したバージョンP (Pommersfelde写本の名から)を校訂し発表する。

Pの出現に対し、同年Grimmはこのテキストが、自らがDとして分類したバージョンの一種であると主張する。同時に彼は、今まで知られてこなかったRg. のテキスト断片を公刊し、それをFと名付ける。これによりRg. テキストは6あるいは7のバージョンに分類されることになる。(A-F、あるいはこれにPが加わる。)

1879年、Bruno Philippはこれらのテキストを4つに統合、再分類する。すなわちBをAの一部、EをDの一部と見なす。PについてはGrimmの見解を支持してDと同じバージョンと見なす。彼はローマ数字を用い、テキストを次のようなバージョンに分類する：I = (A+B)、II = (D+P及びE)、III = F、C = (AとDの混合)。

これに対し、Georg Holz は1893年に発表した研究で、PをD(及びE)から独立したテキスト・バージョンと位置づける。そして彼はGrimm及びBartschの表記に倣って、Rg. のテキストをA、C、D、F、Pの5つのバージョンに分類する。Holzによるこの分類は基本的に現在でも採用されているものである。本稿においても彼の分類、表記に従いたい。

### 1.2. テキスト・バージョンAとDの梗概と両者の関係

Grimm以来の研究では特にA、DがRg. テキスト・ヴァージョンを二分する主流と見なされ、今日に到るまで議論の中心になってきた。従って本稿でもAとDの関係についての問題を中心として扱うこととしたい。以下にその両者の内容を短く紹介する。他のヴァージョンは従来この二つの主流から派生したものと考えられることが多かったので、必要に応じて適宜言及することとする。

Aの内容: ラインのほとりのヴォルムスを治めるギベツヒェ王にはクリエムヒルトという王女がいる。クリエムヒルトは薔薇園を所有し、父王や兄弟たち、婚約者ジーフリート、ハゲネといった12人の勇者たちにそれを守らせている。彼女は自分の婚約者ジーフリートとベルン（ヴェローナ）の名高い勇者ディエトリーヒ・フォン・ベルンとを勝負させて優劣を測ってみたいと考え、ディエトリーヒの国に使者を送る。使者はベルンに赴き、挑戦状を渡す。その挑発に答えてディエトリーヒとその家来の勇者たちはヴォルムスに向かう。かくて、ヴォルムスの薔薇園を守る勇者たちとの間で12組の対一の決闘が行われる。それぞれの戦いにおける勝者は皆クリエムヒルトからキスを受け薔薇の冠を貰う。戦いはディエトリーヒとジーフリートの勝負でクライマックスを迎える。戦いはベルンの勇者たちの勝利に終わる。クリエムヒルトは髭面の戦士にキスを52回も与えるはめになり、顔中血だらけになる。以後彼女は薔薇園を持つことをやめる。

Dの内容: 薔薇園の主人はクリエムヒルトではなくてギベツヒェである。彼は自分の薔薇園を守る12人の勇者たちを倒せる者になら、誰にであれ臣下として仕えよう、と全ての国々に伝えさせる。その使者はフン族の王エツツェルのもとに到る。エツツェルはディエトリーヒと一緒に遠征するように要請する。それとは別にディエトリーヒには（Aにおけると同じように）クリエムヒルトから挑戦状が届いている。エツツェルとディエトリーヒは家来たちを連れて遠征する。戦いでは勝った者が自分のお気に入りの

婦人から（Aではクリエムヒルトから）キスを受け薔薇の冠を貰う。12組の戦いはベルンの側の勝利で終わる。

## 2. Rg. テキスト研究

### 2.1. 19世紀のRg. テキスト研究の特徴

Wilhelm Grimmは1836年に発表した研究の中で、Rg. テキストが特定の作者の意図によって書かれたものではなく、NI. の物語を補足しようという民衆の精神が具現化したもの、個としての作者の創作意志が介在することなく伝説が時間的経過の中で集積したものと主張する。<sup>3)</sup> 彼の関心は伝説の本来的な姿を突き止め、それがどのように変化していったかを知ることであり、自分のRg. テキスト研究の目的を、「伝説の批判研究」(Kritik der Sage)<sup>4)</sup> であるとしている。彼の研究では個としての作者の存在も、テキスト成立におけるその役割も主張されない。<sup>5)</sup>

彼はそのテキスト分類研究において、二つの主流のバージョンAとDを比較し、Aをより本来的な要素を含むバージョンであると考え、Dに比べてより原初的な物語に近いものとする。<sup>6)</sup>

Philipp<sup>7)</sup>さらにはHolz<sup>8)</sup>もその考えを受け継ぎ、Grimmと同じくAの方がDよりも原初的な形態により近いと考える。

Holzは1893年に、前述の研究の中で、Rg. テキストの樹系図を発表する。彼の研究では伝説素材がより簡潔に本来の形で入れられているという理由により、<sup>9)</sup> Aの古い形態を原テキストとして、樹系図上においてAをDより優先し、上位に位置づける。

## 2.2. Rg. テキスト樹系図の研究

### 2.2.1. Holzの樹系図 —Aの重視—

HolzはAとDの関係を中心に、A、C、D、F、Pのバージョン相互の相違点を論じる。彼は主に次のような点に着目している。<sup>10)</sup> (次節以降の説明でも以下の要素が重要な意味を持ち、しばしば言及されるので便宜

上、以下のように番号を付ける。)

AとDの相違点に注目して:

- 1) 薔薇園の主人、あるいは挑発者が  
Aではクリエムヒルト…① Dではギベツヒェ…②
- 2) キスと薔薇の冠を与える者が  
Aではクリエムヒルト…③ Dではお気に入りの乙女…④
- 3) Aはクリエムヒルトが使者を送るエピソードを含む…⑤

以上のような視点を手掛かりとしたRg. テキストの相互関係、及びその成立と伝承についてのHolzの見解は、次のようにまとめられる。

A(A3): 内容的に統一性があり、最も古い形態を残す系列。①③⑤

D(D3): Aの改作を経て成立、Aの内容に引きずられている。ギベツヒェ(②)とクリエムヒルト(①)の両方が薔薇園の主人として挑発。ギベツヒェが挑発するエピソード(②)が、Aの古い形態に加わったと考える。

① (Aの要素) +②④

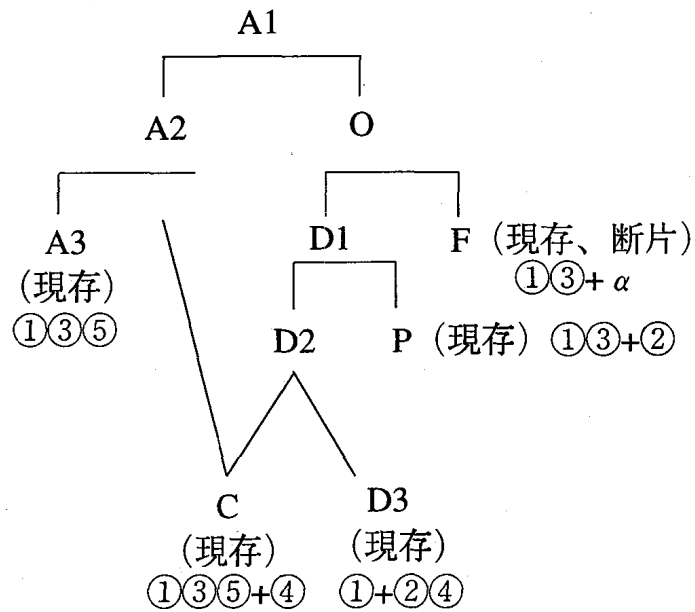
C: 良質なテキスト。AとDの混合(Aを土台としDの要素が加わったもの)。①③⑤+④

F: 「クリエムヒルトが挑発する」(①)「クリエムヒルトが褒美を与える」(③)というAの基本構造を持つ。しかし、Aと異なる部分(⑤とはまた異なる、クリエムヒルトによる使者派遣のエピソード。本稿ではこれを便宜上 $\alpha$ と表わす)を含む。Dとの語彙上の一致点も有する。①③+ $\alpha$

P: Dに極めて近いが短く、描写などでAの要素も含む。戦いの勝者はAと同様にクリエムヒルトからキスを受ける(③)。あとの要素はDと同じ(①+②)。①③+②

そして彼は次のような、AをDよりも上位に置く樹系図を作成する。

Holzの樹系図:



彼は以下のような考察によってこの樹系図を作成している。彼の叙述は、その順番に従い次のように整理できる。

(1) CはA系列及びD系列の混合であるが、現存するA3、D3よりも質が高いため、それらのより古い段階からそれぞれの要素を受け継ぎ改良されたと考える。それでA2とD2が想定される。

(2) ここでD系列の要素を基とするPも、CやD3と同様に、D2から派生したのかどうかという疑問が生じる。そこで現存するC、D3、Pが比較される。PはD系列の基本構造を持ちながらも、CやD3に比べて、より多くA系列の要素を含む故に、より古いテキスト・バージョンであると考えられる。それは前述の、AはDより古い、という基本的な考えに基づく。従ってPは樹系図のより上位に据えられ、そのPの前段階としてD2よりも古いD1が想定される。

(3) DはAに新しい要素(②)が付け加わったと考えられ、Aが改作されDが生まれたということになる。(本来この議論は、(2)の前に為されるべきであろう。<sup>11)</sup>)

(4) FはAの基本構造を有しているので、A系列に入れるべきではないかどうか、Holzは迷ったと述べている。このFは断片で残っているに過ぎ

ず不明な点が多いのである。しかし、Fは、Dとの語彙上の一致点があり、A系列からは外され、Dの側に置かれる。そしてPに比して、更にAとの共通点(基本構造など)を多く持つので、樹系図においてD系列のさらに上位に位置づけられる。とはいえ、D系列に入れるとしても、やはり、Dには見られないはずの(そしてAとも異なると彼が考える)使用者のエピソード( $\alpha$ )が入るので、D1の影響を受けたものとはせず、すなわちA系列-D1-Fと派生したとは考えずに、それらの要素を含んでいたと考えられるOを想定してD1とFとの共通の前段階とする。このOにおいて使用者のエピソード( $\alpha$ )とDとの語彙上の一致点が付け加わったとする。(このFの取り扱い及びOの設定が後に批判されることになる。それについては2.2.2.にて述べる。)

(5) OはA2から派生したのではないか、という疑問が残るが、HolzはここでFの中にもD2の中にも(つまりそこから派生したという全てのテキスト・ヴァージョンの中にも)、A3に含まれる「クリエムヒルトが使者を送る」というエピソード(⑤)が含まれていないことから、<sup>12)</sup> A2の前段階にこのエピソードが含まれていないA1が存在したと考える。すなわちA1は①③と表わせる。

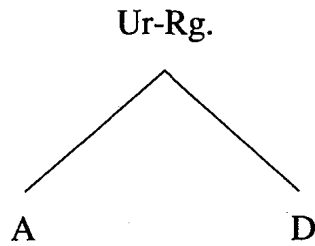
HolzはこのA1が原テキストであると考えてるのである。

### 2.2.2. Holzの樹系図に対する批判 — Ur-Rg. —

Schneiderは1921年の研究でHolzのRg. テキストの成立過程についての見解に異を唱え、AとO(つまりD系列)のような差異の大きな物語ヴァージョン相互の間に直接的な関係を認めてはならないと主張する。またOの設置自体があまりに安易過ぎると考える。<sup>13)</sup> 彼はAを原初形態とし、そこからD系列も生まれたというHolzの考えを根本的に否定する。Schneiderの考えるRg. の原初的形態は原テキストではなく、Holzの考える原テキストA1よりも短い歌謡の形態である。<sup>14)</sup> SchneiderはそれをUr-Rg. と呼ぶ。彼は次のような図を描く。

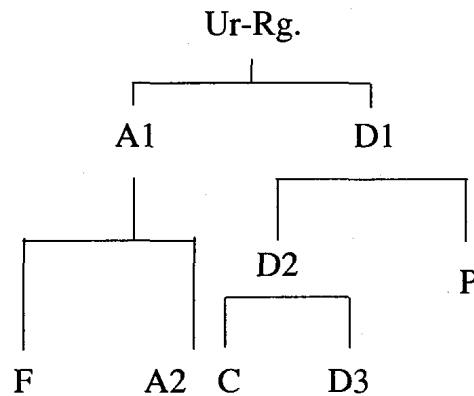


Schneiderの図



Schneiderの考えを受け継ぎ、その弟子Carl Brestowskyも同様にHolzの考えに反論し、1929年に以下のような樹系図を発表する。<sup>15)</sup>

Brestowskyの図



この樹系図において重要な点はFがAの系列に組み入れられていることである。FはAの基本構造 (①③) を持ちながら、Aにおける使用者のエピソード(⑤)とは別の使用者のエピソード( $\alpha$ )、及びDとの語彙上の一致点などを有する。このFをAの系統として分類することをHolzは敢えて拒んだのだと、Brestowskyは考える。何故ならHolzの考えでは、原テキストに⑤が加わってA 2が生まれたのではなくてはならなかったが、もしFの使用者のエピソード $\alpha$ を⑤と同じものとして考えて、FをAの系列に入れると、Fは、A 2にDとの共通の語彙を加えた形と変わらなくなってしまうからである。そうするとA 3の祖先であるはずの原テキストにDの要素が入って

いなければならなくなる。それではA優位の原則が根底から覆されることになってしまうのである。そこでHolzは $\alpha$ を⑤と異なるものと見なし、Aの系列から外れる程の大きな差異と見なして、FをDと同じ側に入れたのだとBrestowskyは見る。この使者のエピソード $\alpha$ 、及びDとの語彙上の一致点の出所を示すためにHolzは便宜的にOを設定していたのである。

これに対しBrestowskyはAの基本構造(①③)を持つFをA系列に入れることによって、より論理的な整合性を持つ樹系図を構築しようとするのである。Brestowskyは、Fにおける使者のエピソード $\alpha$ をA(HolzのA 2、BrestowskyのA 1)における使者のエピソード⑤の影響で生まれたものと考ええる。そしてFにおけるDとの語彙上の一致点などについては、Fの写本を筆写した人間が、その原本に使った写本の欠損部分をD 2の系列の写本の記述によって埋め合わせたために入ったものとして、樹系図作成上、影響を及ぼさないものとする。<sup>16)</sup>

### 3. 作者の役割の重視

#### 3.1. 作者の創作意志

Grimmの考えを引継ぎHolzも、Rg. の原初形態(原テキスト)は、Nl. の物語を補足し、ニーベルンゲン伝説の英雄ジーフリートとバイエルン地方の伝説の英雄ディエトリーヒを比べたいという民衆の欲求が強く影響して生まれたと考える。彼はRg. がバイエルン地方で生まれたために、ディエトリーヒが勝利するのだと主張する。<sup>17)</sup> 彼の研究では伝説伝承のテキスト成立において果たした役割が重要視されている。そのような傾向はテキストの伝承についての彼の見解にも見られる。

Holzの樹系図作成における顕著な傾向は、テキスト成立における伝説伝承からの影響を重視し過ぎ、伝説素材が元の形で入れられていると考えられるAを、あくまで樹系図上においてDの上位に置こうとしていることである。そのような考えをあくまで論理によって延長した結果、Oを考え出したのである。彼は個としての作者が、Rg. テキストの伝承の過程で何ら

かの役割を果たしたということを認めている。しかし伝説素材が質的なレベルで人為的に改変されるという、物語変容の要因は、彼の視野には入っていない。彼の考えでは樹系図の下位に存在する要素は既に、上位のテキストのどれかに入っていないからではないのである。作者の役割は伝説素材を編集することにとどまるのであり、新しい要素を考え出すという役割は与えられていない。その意味では依然として、19世紀の研究に特有な伝説伝承重視の英雄叙事詩観に立脚していると言えよう。

それに対し、SchneiderとBrestowskyの研究においては、伝説に対する関心が、薄れていると言える。

Schneiderは、Rg. の物語の素材は、漠然と巷に流布した伝説から採られたという考えを否定し、歌謡としてまとまった形で伝承されたものであると考える。そうして生まれたのが歌謡の形態をとるUr-Rg. であり、それがテキストの形態を獲得し叙事詩(Aなど)に発展するとき、作者の創作性の存在が必要であったとする。<sup>18)</sup>

Brestowskyの研究では、Ur-Rg. はテキストの形態とされ、同時代の作品とRg. の密接な関係が、描写の比較などを通じて考察されている。そこでは既に個としての作者が具体的に描写レベルの創作・改作を行なったということが前提となる。

とはいえSchneider、Brestowskyの関心は、テキストの実証研究に集中し、13世紀の中頃にRg. が叙事詩として成立した時に、個の存在としての作者が行なったと考えられる創作的営為については顧みられていない。<sup>19)</sup>

Rg. 研究において、個としての作者の創作意志をより重視したのが次節に扱うHelmut de Boorである。

### 3.2. 個としての作者による宮廷騎士文化批判

Helmut de Boorは1959年に発表された研究の中で、伝説研究やテキスト批判研究の対象にしかなくてこなかったRg. を13世紀の文芸制作の環境の中で捉え直し、個としての作者による一文芸作品として解釈する。<sup>20)</sup> De

Boorは作者の意図を考察の中心としているのである。

彼の研究は、Rg. 研究に新しい視点を導入したと評価されるが、<sup>21)</sup> 本稿の論旨に照らした際に重要な点は、内容的・描写的統一性、筋の一貫性などによってテキストの優劣を区別している事である。その前提となるのは、テキストの優劣の差を作者の個人的能力の差に起因させる考えである。そのような考えは、一つの原テキストから、多くのテキスト・ヴァージョンが樹系図的に派生したという、従来のテキスト成立・伝承観の延長線上に生まれたと言える。

彼は、テキスト・ヴァージョンの関係について原テキストAが改作されてDが成立したというHolzの考えを支持する。ただし、Aの成立と改作において、作者が明確な創作意志を有していたと考える点が、決定的に違う。<sup>22)</sup> そしてそれを基にAとDを対比的に解釈する。以下、彼の解釈を辿ってみたい。<sup>23)</sup>

彼はRg. の位置づけに際して、Rg. と、アーサー王物語をその代表とする宮廷騎士文芸との関係に注目している。そして、Rg. には婦人奉仕を中核とする宮廷騎士文化を批判する意図が込められている、と主張する。

De Boorは、クリエムヒルトの描写こそがRg. 解釈の鍵であると考え。彼によれば、Rg. Aの作者はオーストリア・バイエルン地方に生きた騎士階級の者で、宮廷貴婦人クリエムヒルトを否定的に描くことを通じ、フランスで生まれドイツ語圏の西部に広まっていた、婦人奉仕を中核とする宮廷騎士文化を批判することを狙ったのだという。つまりAでは自分の高慢のために勇者たちを呼び寄せ戦わせる宮廷貴婦人の代表としてクリエムヒルトが非難され戦いに負けて痛い目に遭うのだという。そのような作風が持てはやされる背景には、このオーストリア・バイエルン地方の聴衆に広まっていた、西方の宮廷騎士文化に対する反発があったとする。

それに対し、Dが成立したと考えられる西方のアレマン地方では、宮廷騎士文化が広く浸透していて、そのようなAの作風が聴衆には好まれなかったのであり、そのためこの地方の作者は、Aを改作したのでであるとDe

Boorは考えるのである。そのような意図から、戦いへと挑発する主犯格をクリエムヒルト (①) ではなくその父ギベツヒェ王 (②) にすることにして、Aでは戦いへの扇動者として前面に出ている彼女の役割を、Dにおいては後退させ、それによって彼女の責任を相対的に軽減しているのだという。

この際、「クリエムヒルトが挑戦状を送る」(①) というエピソードがDの中に消されずに残り、話の筋が矛盾してしまったのだと彼は主張する。彼の考えでは、Aは話の筋に一貫性があり、また描写における簡素さが、華美な宮廷文化に対する批判に適しているのに対して、Dにおいては筋が一貫せず、宮廷騎士文化批判の要素を消し去れないまま、それと矛盾する婦人描写や宮廷世界の装飾の描写などが付け加わって、Rg. 本来の持ち味が消されてしまっているという。

ここでは、このような矛盾が生じた理由が、Dの作者の個人的な能力の低さに求められている。また同様にAとDの相違は、個としての作者の主張の相違が反映されたものだと考えられている。

さらにDe Boorの研究において、作者が聴衆の好みに合わせて物語を書いたという点に着目していることも見逃せない。Rg. が具体的にどのような階層の人間に受容されたのかという問題は、Rg. を13世紀における文芸創作の環境の中に、より明確に位置づけようとする際に避けては通れないことだからである。<sup>24)</sup> 彼以降の研究では、むしろ受容者・伝承者としての聴衆の存在がクローズアップされてゆくのである。つまり不特定多数の聴衆が共有する認識が問題となってくるのである。そしてそれに伴いテキストの多元論的成立が主張されるようになる。

#### 4. 多元論的成立観

##### 4.1. ジャンルの重視

Joachim Heinzleは1978年に発表した研究の中で、従来の樹系図的な考えを土台にした一元論的成立観を根本的に否定する。彼は、原初形態は残っ

ているテキストの数だけある、と主張するのである。<sup>25)</sup>

彼の研究では、個々の叙事詩の個別的な問題よりも、ジャンル内あるいはジャンル間に存在する共通のモチーフ、傾向、共通の予備知識のレパートリーがより大きくクローズアップされる。言い換えれば彼の興味は個別の叙事詩の総体としてのジャンルに向けられるのである。彼はRg. の属するジャンルを騎士物語的ディエトリーヒ叙事詩群 (aventurehafte Dietrichepen) と名付けている。<sup>26)</sup>

彼はRg. の物語は口碑による伝承と書記による伝承の両方によって伝わったと考える。そして書記による伝承としてのテキストは、その成立と変容において口碑による伝承の影響を受けた主張する。<sup>27)</sup> 口碑による伝承においては聴衆は受容するのみならず、物語の伝承者として、叙事詩の成立、発展に積極的に寄与する。

彼は口承詩論(oral poetry)の考え方を土台にAとDの違いを説明する。口承詩論の考え方を要約すれば、文字の読み書きのできぬ人たちが口承で伝えた物語は、記憶に頼って語られるため、決まり文句や特定のモチーフの繰り返しが多くなり、また語り手は話の筋の一貫性を無視してもモチーフを取り込もうとするために、話の筋に矛盾が生じる、といったものである。<sup>28)</sup> このような考えを土台とし、Heinzleは次のようにRg. AとDの関係についての論を進める。

Rg. は他の騎士物語的ディエトリーヒ叙事詩群の作品と共通のモチーフを下敷きとしているが、とりわけRg. においてはそれらに特有なモチーフのうち、特に二つ、すなわち「求婚のモチーフ」(前述①に相当)と「決闘のモチーフ」(前述②に相当)が中核を形成しているとHeinzleは考える。そしてその二つのモチーフを兼ね備えたテキスト(①+②)はDであるとする。<sup>29)</sup> ここでいう「求婚のモチーフ」とはクリエムヒルトが挑発し、そのために戦士が戦うことであり、「決闘のモチーフ」とはギベツヒェ王が諸国に使者を送って自らが主催する決闘に戦士たちを呼び寄せることである。テキストAにおいては前者の「求婚のモチーフ」が重視されたために、

ギベツヒエ王が使者を送って挑発するエピソード「決闘のモチーフ」が抜け落ちたのだ、とHeinzleは主張し、Aの優位を否定する。また樹系図研究で争点となっていたFを彼はあっさりとA、Dから独立した系統として分類する。<sup>30)</sup>

テキストの多元論的成立観と表裏を成す創作主体の超個人的性格を前提としてRg. を考察するとき、一見するとテキスト・ヴァージョンが相互に関わりなく、何種類も生まれるのは想像に難くないように思われる。しかし物語を規定するモチーフやパターンが共通であるにも拘わらず、何故、内容の異なるヴァージョンが生まれるのであろうか。何故、Dにおいては「求婚のモチーフ」と「決闘のモチーフ」が選択され、Aでは後者が抜け落ちるのだろうか。個としての作者の一人格を想定せずにそのような恣意的とも見えるモチーフの選択が可能なのだろうか。

そのような疑問を想定してであろうが、Heinzleは自説を説明するために、騎士物語的ディエトリーヒ叙事詩群のテキスト成立過程の3つの特性、すなわち「伝承者の裁量」(die Freiheit der Tradierenden)、「テキストの定型性」(die Schablonenheit der Texte)、「テキスト構造の開放性」(die strukturelle Offenheit der Texte)を挙げている。<sup>31)</sup> 彼は、これらの相互作用によって共通のモチーフやパターンが、それ自体の定型を守りつつ、伝承者の裁量によって、テキストの中に複合的に盛り込まれてゆくと説明する。この説明によって、Rg. Dにおける異なるモチーフの並列、或いはAとDの構造の違いも、根拠付けられることになる。

確かにそのようなテキストのマクロ構造については、上記のようにジャンルに特有な傾向を根拠に説明できるかもしれない。しかし、まだ問題は残る。果たしてテキストのさらにミクロな部分、すなわち何らかの意図を想定せざるを得ない繊細な表現などについても、このようなジャンルに特有な傾向を根拠に説明できるのだろうか。そのようなミクロな、繊細な表現の好例として、De Boor以来問題とされて来た、Rg. におけるクリエムヒルトの否定的な描写が挙げられよう。

## 4.2. パロディー的傾向

クリエムヒルトの否定的な描写も、人為的・意図的なものではなく、やはりジャンルに特有な構造によって説明がつくものなのであろうか。

Heinzleは、Rg. を宮廷騎士文化についての作者の態度表明であるとするDe Boorの考えに対して異を唱える。つまりHeinzleはRg. のクリエムヒルト描写を宮廷騎士文化に対する批判を狙った人為的なものとする解釈には否定的なのである。<sup>32)</sup> クリエムヒルトの描写は、個人的な価値判断といった見地からではなく、騎士物語的ディエトリーヒ叙事詩群のジャンルに特有な「高慢のモチーフ」、「婦人の罵り合い」、パロディー化といった要素から説明がつくとHeinzleは考える。そして彼はRg. で描かれるのはクリエムヒルトの高慢さ、冷酷さといった悪女の姿であるとする。彼はそれがNl. のクリエムヒルト像がパロディー化されたものであると考える。

Nl. のクリエムヒルトは宮廷的で貞淑な深窓の姫君からやがて復讐の女鬼 (*vâlandinne*) となってゆく。ところがクリエムヒルトの宮廷的で貞淑な側面が、ジャンルに特有なパロディー的性格で消えてしまう。その結果、必然的に彼女の否定的な側面が一面的に誇張されたのだとHeinzleは考えるのである。<sup>33)</sup>

このようにHeinzleは多元論的なテキスト成立観と超個人的な創作主体の存在を前提としているため、Rg. のパロディー的描写を、人為的な創作とは考えず、あくまでジャンルに特有なモチーフや傾向によって規定され、伝承の中で自然に生み出された結果として、構造的な側面から説明する。

しかし、Rg. のクリエムヒルト描写が何らかの意図によるかどうかという問題について、彼は慎重に明言を避けているように思われる。<sup>34)</sup>

## 4.3. クリエムヒルトへの潜在的反感

Otto Gschwantlerは、ディエトリーヒ叙事詩群には、勇者が婦人（奉仕）に対して無関心であるという傾向が見られると述べている。<sup>35)</sup>



Michael Curschmannは、ディエトリーヒ叙事詩群には、Rg.のみならず他の作品にも共通するジャンルに特有な傾向として、NI.の主人公クリエムヒルトに対する潜在的反感が存在したと主張し、自説を展開する。<sup>36)</sup>

彼は13世紀半ばに書記による伝承として成立したRg.は15世紀後半に至る中世後期の約200年間に、クリエムヒルト批判の口碑による伝承の影響を受け、同時に逆にそのような口碑による伝承に影響を与えて来たのだと主張する。

このようなCurschmannの研究を始めとして、最近ではクリエムヒルトに対する反感についての言及が目立つ。<sup>37)</sup>

##### 5. 超個人的主体による多層的伝承 —結びにかえて—

以上、Rg.研究の問題点を、叙事詩成立と伝承過程における創作意志についての見解の変遷に着目して検証してきた。最近の研究では、Rg.に多元論的成立が想定され、個としての作者の存在は考え難くなり、ジャンルに特有な傾向、受容者が共有した背景的知識が重視されるようになってきた。にも拘わらず、一方ではRg.がパロディーであるという、創作意志の存在なしには考えられない性質が指摘されている。一体誰が物語を創作したのだろうか。

このような、テキストの成立及び伝承の過程と、創作意志との関係について、1970年代以降のoral poetryの影響を何らかの形で受けている多くの英雄叙事詩研究では、作者、及び受容者という峻別が消え、両者はときに伝承者(die Tradierenden)として同一視され、超個人的な存在として物語の創作に携わったと考えられる。Curschmannはそのような視点から、Rg.のパロディー的な描写の背景には、書記によるテキスト記述と、書記をとりまく口碑によって伝わったクリエムヒルト批判の声という、多層的な伝承の過程が存在し、それらが互いに影響し合いながら物語を織りなしていたと考えるのである。

## 註

- 1) Joachim Heinzle: Rosengarten zu Worms. In: Die deutsche Literatur des Mittelalters. Verfasserlexikon, Bd8, Berlin 1992, Sp. 187.
- 2) Georg Holz: Die Gedichte von Rosengarten zu Worms, Halle 1893, S. If.
- 3) Wilhelm Grimm (Hg.) : Der Rosengarten, Göttingen 1836, S.Vf.(前書き部分のページ)
- 4) W. Grimm, a. a. O., S. LXI.
- 5) W. Grimm, a. a. O., S. V. (前書き部分のページ)
- 6) W. Grimm, a. a. O., S. LXff.
- 7) Bruno Philipp: Zum Rosengarten, Halle 1879, S. LXX.
- 8) G. Holz, a. a. O., S. XV. ただし、Holzと違ってGrimmはAからDが生まれた、というような両者の直接的な関係については否定する。Vgl. W. Grimm, a. a. O., S. LVIII. また、HolzがAのDに対する優位の考え方を引き継いだという点については以下を参照。Vgl. Joachim Heinzle: Mittelhochdeutsche Dietrichepik, München 1978, S. 124.
- 9) 例えばRg. 研究においてはこの他にも、1881年にAnton Edzardiが発表したRg. のNibelungensageとの関係についての研究などに同様の傾向が見られる。Aに比べてDの方が伝説に照らして、より本来的な姿を留めていると主張している。Vgl. A. Edzardi: Rosengarten und Nibelungensage . In: Germania 26 (1881), S. 172ff.
- 10) Holzのテキスト分類に関する記述については、Vgl. Holz, a. a. O., S. XIVff. なお、テキストバージョンを表わすA1、A2、D1などの表記については、Holzの著述では、数字がアルファベットの右上に小さく書かれているが、本稿の説明においては、作業上の理由などから数字を大きく記す。
- 11) 叙述の順番については、先行研究においては言及されていない。
- 12) しかし実際はFにもクリエムヒルトが使者を送るエピソードが含まれている。ただし、その描写、内容に相違があるのである。従ってG. HolzはFにおける使者のエピソードをAのそれとは同一視しない。もしこれを同一視するならばFはAと極めて近い関係となる。Vgl. G. Holz, a. a. O., S. XVI.
- 13) Vgl. Hermann Schneider: Das mittelhochdeutsche Heldenepos. (Wege der

- Forschung, Bd. CIX) , Darmstadt, 1969 , S. 208. 所出: Zeitschrift für deutsches Altertum und Literatur (= ZfdA.) 58(1921), S. 97—139.
- 14) このようなテキストの原初形態についての考え方を、SchneiderはNI. 研究に同様のテキスト成立観を導入したAndreas Heuslerから借用したと明示している。Vgl. Schneider, a. a. O., 1969, S. 182f. u. S. 206.
  - 15) Carl Brestowsky: Der Rosengarten zu Worms (Tübinger germanische Arbeiten 7) , Stuttgart 1929, S. 90.
  - 16) Brestowsky, a. a. O., S. 82ff.
  - 17) Vgl. G. Holz, a. a. O., S. CII.
  - 18) Schneider, a. a. O., S. 206.
  - 19) このような、作者とその同時代の文芸制作の環境についての無関心という傾向は、A. HeuslerのNI. 研究についても指摘される。Vgl. Walter Falk: Das Nibelungenlied in seiner Epoche, Heidelberg 1974, S. 37.
  - 20) Helmut de Boor: Die literarische Stellung des Gedichtes vom Rosengarten in Worms. In: H. de Boor: Kleine Schriften II, Berlin 1969, S. 229—245. 所出: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur (=Beitr.) 81 (1959), S. 371—391. 1930年代からNI. を1200年頃の宮廷騎士文化の中で生まれた文芸作品として、伝説素材の知識などを度外視して内在的に解釈しようという新しい研究の流れが起こった。De BoorのRg. 研究は、NI. 以外の芸術性と知名度の低い叙事詩の研究に上記のような新しい研究手法を持ち込む突破口を開くものとして評価された。Vgl. Heinz Rupp: Heldendichtung als Gattung der deutschen Literatur des 13. Jahrhunderts. (Wege der Forschung, Bd. CIX), Darmstadt 1969, S. 231.
  - 21) Heinze, a. a. O., S. 245.
  - 22) De Boor, a. a. O., 1969, S. 230.
  - 23) ebenda, S. 230ff.
  - 24) Werner Hoffmannによれば、Rg. などの英雄叙事詩は貴族のみならず、都市の市民にも広く受容されていたという。Vgl. Werner Hoffmann: Mittelhochdeutsche Heldendichtung (Grundlage der Germanistik 14) , Berlin 1974, S. 42ff.
  - 25) Heinze, a. a. O., 1978, S. 100.
  - 26) aventiurehaftを普通に訳せば「冒険の」となろうが、宮廷騎士叙事詩との関係からそのような名称を付せられているため、筆者は敢えて意識し

た。

- 27) Heinzle, a. a. O., 1978, S. 70
- 28) 口承詩論 (oral poetry) については以下を参照のこと。Vgl. W. Hoffmann, a. a. O., S. 53–59. (ただしHoffmannはドイツの英雄叙事詩研究に口承詩論を援用することには否定的である。) また、Vgl. W. Hoffmann: Nibelungenlied, Stuttgart 1992, S. 81–84, Vgl. Heinzle, a. a. O., 1978, S. 67ff., 或いは、Vgl. Edward R. Haymes: Das mündliche Epos, Stuttgart 1977.
- 29) このHeinzleの考え方は、考察方法は違うものの、結果的にはA. Edzardiの考えに似ている。EdzardiはRg. やNI. の土台には、クリエムヒルトによる挑発のモチーフ、及びギベツヒェによる戦いへの誘いのモチーフ、の二つがあったという。註9) を参照のこと。
- 30) Heinzle, a. a. O., 1978, S. 132ff.
- 31) ebenda, S. 230f.
- 32) ebenda, S. 252ff.
- 33) ebenda, S. 263ff. 騎士物語的ディエトリーヒ叙事詩群にはジャンル自体の最も重要な特徴として、宮廷騎士叙事詩と一見似た筋立てでありながら、本質的に異質なものであるために、宮廷的な価値を相対化・パロディー化する性質があるとHeinzleは主張する。
- 34) このパロディー的描写の意図について言及しないHeinzleの態度は意識的な態度であるとMichael Curschmannは示唆する。Vgl. M. Curschmann: Rez. zu Mittelhochdeutsche Dietrichepik, J. Heinzle, München 1978. In: ZfdA. 109(1980), S. 153. またこのようなRg. に見られる微妙な創作意図について、既にW. Grimmが興味深い指摘を残している。「Rg. はその内容から見れば確かに伝説が具現化されたものだが、しかし同時にまた考え出されたものなのでもあり、そのとき伝説を補足し拡張しようとする無意識の詩的な力と並んで、意図的なものと意識がそのような試みにおいて作用していたのであろう、その相反する関係をはっきりさせることはできないが。」(W. Grimm, a. a. O., S. LXIX.)
- 35) Vgl. Otto Gschwantler: Rez. zu Mittelhochdeutsche Dietrichepik, J. Heinzle, München 1978. In: Beitr. 104 (1982), S. 151.
- 36) Vgl. M. Curschmann: Zur Wechselwirkung von Literatur und Sage. Das „Buch von Kriemhild“ und Dietrich von Bern. In: Beitr. 111(1989), S. 380–410. こ

の中で、CurschmannはThidrekssaga (Kap. 385, Kap413) を根拠に以下のような口碑による伝承が存在し、ディエトリーヒとクリエムヒルトの潜在的対立が知られていたと主張する: ディエトリーヒ主従は国を盗られ放浪の身となるが、やがてフン族の王エッツェルの元に滞在して捲土重来を期することになる。ディエトリーヒは長い滞在の間、エッツェルの王妃ヘルヒエの計らいで窮地から救われることも多い。やがてヘルヒエは死ぬ間際、後妻が不幸をもたらすと忠告する。その後妻がクリエムヒルトなのである。Vgl. ebenda, S. 388ff.

- 37) クリエムヒルトはその兄弟殺しの罪などから、13世紀以降、悪名高かったという。Vgl. W. Hoffmann, a. a. O, 1974, S. 95.

(慶應義塾大学大学院後期博士課程在学中)

# Die Tendenzen der Forschung über „Der Rosengarten zu Worms“

— Über den schöpferischen Willen in der Entstehung und Überlieferung der Texte —

Noriaki Watanabe

„Der Rosengarten zu Worms“ (Rg.) ist ein Heldenepos aus der Gattung der Dietrich-Epen, in dem Stoffe des Nibelungenliedes parodistisch verarbeitet wurden. Über die ursprüngliche Autorschaft dieses um 1250 entstandenen und bis zum Ende des 15. Jhs. in verschiedenen Textfassungen überlieferten Epos herrscht bis heute Unklarheit. Seit Beginn des 19. Jhs. hat sich die Einstellung zum Entstehungs- und Überlieferungsprozess der Rg.-Texte gewandelt. In diesem Zusammenhang hat sich vor allem die Ansicht über die Beziehung zwischen der subjektiven Produktivität einer Autorpersönlichkeit und dem Einfluss durch autorexterne Elemente verändert.

Wilhelm Grimm (1836) und Georg Holz (1893) dachten, daß die Rg.-Texte aus dem Bestreben des Volkes, dem Nibelungenhelden Siegfried dem Volkshelden Dietrich von Bern gegenüberzustellen, entstanden seien. Es besteht bei ihnen also die Tendenz, äußere Elemente wie hier die Textbedingtheit durch die Verarbeitung und Variation überlieferter Sagenstoffe durch das Volk über den Einfluß einer Dichterpersönlichkeit zu stellen.

Die positivistische Textkritikforschung von Hermann Schneider (1921) und seinem Schüler Carl Brestowsky (1929) führte zu einer anderen Gewichtung des Verhältnisses zwischen Überlieferung und Autor. Vor allem Brestowsky untersuchte die Rg.-Texte nicht mehr im Hinblick auf die Rezeption der Sagenstoffe, sondern sah in ihnen vielmehr ein in der realen Welt der literarischen Produktion durch einzelne Autoren hergestelltes Werk.

Helmut de Boor (1959) führte diesen Gedanken weiter, indem er in der

Auseinandersetzung des Dichters mit der realen Welt einen Ausdruck der jeweils vorhandenen Einstellungen für und gegen die höfische Kultur sah. Diese Interpretation durch de Boor beruht auf der Annahme von der Singularität der Archetypen der Texte.

Dagegen hält Joachim Heinzle (1978) seine Auffassung von der Pluralität der Archetypen der Rg.-Texte. Wichtig ist ihm nicht die Einstellung eines einzelnen Dichters, sondern die gemeinsamen Motive und Tendenzen der Dietrichepen. Als besonderes Merkmal dieser Gattung nannte Heinzle die Komisierung und Prodisierung des überlieferten Stoffes.

Michael Curschmann (1989) beschäftigt sich mit der wechselseitigen Beziehung zwischen der mündlichen und schriftlichen Überlieferung. Seiner Meinung nach gab es im Spätmittelalter einen im Publikum geführten Diskurs, in dem der Feindseligkeit gegenüber der Protagonistin des Nl., Kriemhild, Raum gegeben wurde. Laut Curschmann beeinflussten sich dieser öffentliche Diskurs und die schriftlichen Textfassungen bis zu einem gewissen Grade gegenseitig. Somit schreibt er dem Publikum einen schöpferischen Willen zu.